

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | グリーン『倫理学序説』における共通善  |
| Sub Title        | Common good in Green's Prolegomena to ethics  |
| Author           | 水野, 俊誠(Mizuno, Toshinari)   |
| Publisher        | 慶應義塾大学倫理学研究会  |
| Publication year | 2022  |
| Jtitle           | エティカ (Ethica). Vol.15, (2022. ) ,p.41- 69   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20220000-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20220000-0041</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# グリーン『倫理学序説』における共通善

水野俊誠

## はじめに

共通善は、究極善であり、行為の指針ともなる。それ故、グリーン  
の倫理学の核心にあるものである。それにもかかわらず、共通善の概念はあ  
いまいであるとして批判されてきた<sup>1</sup>。そして、この概念に関する様々な解釈  
が提案されてきた。そこで本論では、『倫理学序説』における共通善とは  
何かを明らかにすることにしたい。

共通善は、道徳的善であるとグリーンは述べている。そこで、共通善  
について見る前に、善および道徳的善とは何かを見る（第1節）。その後、  
共通善とは何かを見る（第2節）。次に、共通善を追求する人々の間で競  
合が起こりえないというグリーンの見解に対するシジウィックによる批判  
を検討する（第3節）。この検討を通して、共通善の意義を明らかにした  
い。

---

\* 本稿で用いる略号は以下の通り。

PE: Green, Thomas Hill, *Prolegomena to Ethics*, 1883, D. O. Brink ed., Clarendon Press, 2003. (友枝高彦、近藤兵庫訳『グリーンとその倫理学』(培風館, 1932年)) (略号の後の数字は節を表す)

L: Sidgwick, Henry, *Lecture on the Ethics of T. H. Green, Herbert Spencer, and J. Martineau*, 1902, J. Constance ed., Cambridge University Press, 2012 (略号の後の数字は頁を表す)

1 Cf. Nicholson, Peter P., *The Political Philosophy of the British Idealism: Selected Studies*, Cambridge University Press, 1990.

## 第1節 善と道徳的善

グリーンは、『倫理学序説』第171節で、以下のように述べている。

本書で、善の共通の特徴は、それがある欲求を充足することである。欲求のあらゆる充足の中に快楽がある。このように、対象の快さは、それが善いことに必ず伴う。

善とは、どんな欲求であれ、その欲求を充足するものである。誰の欲求を充足するものであろうか。欲求のあらゆる充足の中に快楽がある。その快楽を感じるのは、欲求を持つ人である。だとすれば、善とは、欲求を持つ人の欲求を充足するものである。

上の一節のすぐ後で、グリーンは以下のように述べている。

善一般を、欲求を充足するものと見なすが、我々が欲する対象を決して必ずしも快楽ではないと考える時、我々は自然に、道徳的善を、道徳的行為者の欲求を充足するもの、あるいは道徳的行為者が、自らが必ず追求する自己自身の充足をその中に見出せるものとして区別するだろう。真の善を、我々は同じ仕方で理解するつもりだ。それは、道徳的行為者の努力が現実に住住できる目的である。

善は、道徳的善をその構成要素の一つとする。道徳的善とは、道徳的行為者の欲求を充足するものである。言い換えれば、道徳的行為が自己の充足を見出すものである。道徳的善こそが真の善である。他方、感覚的善は見かけ上の善である (*Ibid.*)。

道徳的善について、グリーンは、『倫理学序説』第243節で、以下のように述べている。

外部から人に到来し、外から来るものとして彼に属しあるいは附着する感覚的な善いものと、その人の善い性質との区別は、少なくとも理解されている。後者は前者との関係において、社会の物質的福祉に貢献する性質として主として考えられるかもしれない。獲得しうる外的な何かから独立に、純粋な善それ自体としての徳の明確な観念はまだないかもしれない。だが、繁栄とそれに値することとは異なるものであるということは、理解される。そして、値することの認識は、それ自体で、感覚的あるいは物質的なものから区別された道徳的善あるいは靈的善の認識である。

人の外部からもたらされる感覚的な善とその人の善い性質、物質的な繁栄とそれに値することとは異なる。前者は自然的善であり、後者は道徳的善である。道徳的善とは、徳である。そして、道徳的善とは、自然的善との関係において見れば、社会の物質的福祉という自然的善に貢献する性質である。

## 第2節 共通善

真の善とは何か。この問いに答える手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第202節の以下の一節である。

これ〔道徳的義務と法的権利との概念の根底に同じようにある観念：引用者〕は、絶対的で共通な善 (an absolute and common good)、それを他者ととも思念する人格に共通する善、何らかの瞬間に、それが彼らの好みに合うかどうかにかかわらず、彼と他者にとっての善の観念である。

道徳的義務および法的権利・義務との根底には、絶対的な善すなわち真の

善の観念がある。絶対的な善すなわち真の善とは、共通善である。共通善とは、自己と他者にとっての善、あらゆる人格に共通する善である。共通善を私的善と対比すれば、以下のようになる。すなわち、私的善は、ある人だけにとっての善である。具体的には、A にとっての私的善は、A だけにとっての善であり、B にとっての私的善はB だけにとっての善である。他方、共通善は、A にとっての善であるだけでなく、B にとっての善でもある。

では、共通善の内実は、どのようなものだろうか。

上の問いに答える手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第 245 節の以下の一節である。

市民社会は、共通善が存在するという考えの上に基づけられうるし、基づけられるが、社会のより恵まれない成員において、その考えは、事実、実現されない。そして、それが実現されないのは、その善が競合されることを許す対象において追求されるからである。それらは、全員によって等しく獲得されえない類のものである。それらの獲得における、幾人かの成功は、他の人々の成功と両立できない。善として一般的に追求される対象が、各人による獲得あるいは獲得への接近がそれ自体、他の全員によるその獲得への貢献となる、心の状態あるいは性格になるまでは、社会的生は、一つの戦争であり続けなければならない。(強調は引用者)

共通善とは、各人がそれを獲得することが、全員がそれを獲得することに貢献するような心の状態あるいは性格である。それは、全員が同じように獲得できるものである。それ故、共通善を追求する人々の間で競合は起こりえない。

筆者の考えでは、上述の心の状態あるいは性格には、(a) 能力の実現、(b) 永続的自己の充足、(c) 善意志、(d) 相互奉仕の理想への献身、(e)

人間の完成という側面を見出すことができる<sup>2</sup>。これらの側面を、順に見ていこう。

(a) 能力の実現について。第一に、グリーンは、『倫理学序説』第 286 節で以下のように述べている。

我々の理論は、道徳の発展が、人間の魂の能力の完全な実現のうちにある真のあるいは絶対的な善の理想の、人間における働きに基づけられるというものである。……一方で、共通善が共通する人々の範囲の絶えず拡張する概念が、他方で、人類と同じ外延を持つ普遍的社会の目的であることと整合する、共通善そのものの本性の概念が生じてきた。善は、ある人または集団が他者を排除して獲得あるいは享受できる何かとしてではなく、それが人間の魂の能力の完全な実現になるとすれば、全員が参加しうる、全員が参加しなければならない、精神的

- 
- 2 これらの諸側面は、以下の文献などを参考にして、筆者が分類したものである。Brink, David O., *Perfectionism and the Common Good: Themes in the Philosophy of T. H. Green*, Oxford University Press, 2003, Dimova-Cookson, Maria, *T. H. Green's Moral and Political Philosophy: A Phenomenological Perspective*, Palgrave, 2001, Greengarten, I. M., *Thomas Hill Green and the Development of Liberal-Democratic Thought*, University of Toronto Press, 1981, Nicholson *op. cit.*, Simhony, Avital, "T. H. Green's Complex Common Good: Between Liberalism and Communitarianism", Simhony A., Weinstein D. eds., *The New Liberalism: Reconciling Liberty and Community*, Cambridge University Press, 2001, pp.69-91. Tyler, Colin, *The Metaphysics of Self-Realization and Freedom: Part I of The Liberal Socialism of Thomas Hill Green*, Imprint-academic, 2010, Mander, W.J., *British Idealism: A History*, Oxford University Press, 2011. 菊池理夫「共通善の政治学：西洋政治思想の伝統として」『法學研究：法律・政治・社会』第 78 巻第 7 号、1-57 頁、萬田悦生『近代イギリス政治思想史研究——T・H・グリーンを中心として』慶應通信、1986 年、行安茂「シジウィックの二元論と T・H・グリーン」行安茂編『近代イギリス倫理学と宗教——バトラーとシジウィック』晃洋書房、1999 年、244-265 頁、行安茂「グリーンにおける自我実現の社会的性格」『京都府私学研究論集』第 2 号、1964 年、15-23 頁。

活動としてますます明確に考えられるようになってきた。(強調は引用者)

真の善あるいは絶対的な善とは、共通善である。そして、共通善とは、人間の魂の能力の完全な実現である。それは、誰も排除しない普遍的社会の目的である。それ故、全員が参加できる精神活動である。加えて、それは道徳的理想である。それ故、全員が参加しなければならない精神活動である。

第二に、グリーンは、『倫理学序説』第283節で、以下のように述べている。

何らかの共通善の追求に従事する大多数の人にとって、実際、「人間の魂の能力の実現」あるいは「人間の完成」という：引用者]表現は、いかなる意味も伝えないかもしれない。それにもかかわらず、彼らの追求の対象が彼らにとって魅力を持つのは、そのような実現の一部として、またはそのような実現に貢献するものとしてである。

共通善を追求する人々が、ある対象を追求するのは、その対象が人間の魂の能力の実現の一部またはその実現に貢献するものだからである。だとすれば、共通善とは、人間の魂の能力の実現にほかならない。

では、人間の能力は、どのように実現されるのだろうか。この問いに答える手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第246節の以下の一節である。

徳の真の価値は、徳が向けられる目的のより完全で明確な概念とともに高まる。つまり、幸運ではない性格としての、外部からの善いものの受け入れではない内部からの人間の能力の実現としての、所有ではない機能としての、目的のより完全で明確な概念とともに高まる。(強調は引用者)

人間の能力の実現は、自己の外から与えられるものではない。裏を返せば、人間の能力は、自らの性格の育成として内発的にのみ実現される。

次に、(b) 永続的自己の充足について、グリーンは、『倫理学序説』第 232 節で以下のように述べている。

事実、自分自身にとっての真の善の観念は、自分自身によって享受されるべき一連の快樂の観念ではない。究極的または原理的に、真の善の観念は、永続し自分自身を永続すると考える自己……にとっての充足の観念である。(強調は引用者)

快樂は、移ろいやすいものである。言い換えれば、永続しないものである。他方、自己は永続的なものである。従ってまた自己の充足は永続的なものである。ところで、真の善とは永続的なものである。だとすれば、真の善とは、一連の快樂ではない。自己の充足である。

では、自己充足の永続性は、何に由来するのだろうか。

上の問いに答える第一の手掛かりとなるのは、今しがた一部を引用した『倫理学序説』第 232 節の一節である。「真の善の観念は、究極的または原理的に、永続し、自分自身を永続すると考える自己、だが、ある種の社会との同一視においてのみ自身を永続すると考えることができる自己、それとともにのみ自己が自らを生き続けるものとして考えうる、共同体における人々の充足でもあるだろうという条件でのみ、自身の充足を永続的なものとして期待できる自己にとっての充足の観念である」(PE 232) (強調は引用者)。共同体の充足は、個人の充足よりも永続的なものである。それ故、個人が、自己の充足と共同体の充足とを同一視し、自己の充足が共同体の全員の充足ともなる時にのみ、自己の充足は永続的なものとなる。以上から、自己充足の永続性は、自己の充足と共同体の充足との同一視から生じる。



上の問いに答える第二の手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第202節の以下の一節である。

自らの快樂と苦痛が他者の快樂と苦痛に依存することに気付いてしまえば、彼〔家族の情愛と承認された義務とを持ちうる人：引用者〕は、自分自身の可能な充足の觀想のうちに、他者の充足を、自らの快樂のための手段としてではなく、他者自身にとっての目的として含めることができるに違いない。要するに、他者の永続的な福利を含む永続的な福利を思念し、それを追求することができるに違いない。

自己の充足（福利）は、他者の充足（福利）を構成要素の一つとすることによって、永続的なものとなる。だとすれば、自己充足の永続性は、自己の充足と他者の充足との同一視から生じる。

上の問いに答える第三の手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第232節の以下の一節である。

真の永続的な善の觀念は、……人間の意識の初期の段階において、すでに社会的善——その人自身にとっての私的な善ではなく共同体の成員としての彼にとっての善——でなければならなかった。というのは、真の永続的な善の觀念を生じさせるのは、その觀念が、自分自身を永続的なものと見なすある人の考えだからであり、自分自身を永続的と見なす考えは、その持続する生の中で自分自身が生きていとその人が考える他者と、自分自身との同一視から切り離せないからであり、……

真の善の觀念は、永続的な自己の觀念から生じる。そして、後者は、自己と他者あるいは共同体との同一視から生じる。若干敷衍して言えば、自己にとっての善と他者あるいは共同体にとっての善との同一視から生じる。

では、なぜ、自己と他者あるいは共同体との同一視は、永続的な自己の観念をもたらすのであろうか——自己の充足と、他者あるいは共同体の充足との同一視は、永続的な自己充足をもたらすのであろうか。

上の問いに答える手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第 229 節および第 231 節の以下の一節である。

ある人が——おそらくまったく不明瞭に——その想像によって自らの欲求が時に喚起される快樂のはかなさについて反省する時、何が、最後まで存続し、それらの欲求の後まで残る自己を充足できるかと、……尋ねる時、自らが自分自身と同一視し、その存続が自分自身の存続のようである家族の幸福という考えが、彼の心を占める。

可能な幸福または不幸の永続的主体として自分自身を未来へ投企することによって——人は、永続的善を追求する際に自分自身をそのように投企しなければならない——彼は自らの子孫を自分自身に結び付ける。そうでなければ、死の予想が永続的善に対する要求に与えるに違いない結果を無効にするのは、この結び付きである。

家族や子孫は、自己の死後も生き残る。だとすれば、家族や子孫の充足は、永続的なものである。それ故、人が自己を自らの家族や子孫と同一視するならば——家族や子孫を、自己を受け継ぐものと見なすならば——、自己の充足は永続的なものとなる。以上に鑑みれば、自己充足の永続性は、自己と家族や子孫との同一視、および家族や子孫の永続性から生じると言える<sup>3</sup>。

---

3 この点に関して、以下の一節も参照。「あらゆる種類の徳は、自分自身を、真のまたは永続的なものと考えられたある善で充足させる、その個人の努力から生じる。そして、その個人が善についてそのように考えうるのは、自分自身と社会とに共通なものとしてのみである。彼は、自分自身を、自分自身の充足と

だが、話はここにとどまらない。自己充足に関して、グリーンは、『倫理学序説』第180節で以下のように述べている。

ある媒介を通じて、その結果としてある限界の下で、……一つの神的  
精神がしだいにそれ自身を人間の魂の中に再生する。自らの中のこの  
原理のおかげで、人は、——その実現においてのみ自らを充足させう  
るので、その実現が自らの真の善を形作る——確固たる諸能力を持つ。

神の精神（神的原理）は、永続的なものである（PE 187）。ところで、すべての人の自己は、物質という媒介を通じた神の精神の再現である。だとすれば、自己は神の永続性を分有する。それ故、自己の充足は永続的なものである。加えて、神の精神が人間に与えた能力の実現は、真の善であり、自己の充足をもたらす。ところで、永続的な神が与えたものは、神の永続性を分有する。だとすれば、能力の実現は永続的なものである。従ってまた、能力の実現がもたらす自己の充足は永続的なものである。以上に鑑みれば、自己充足の永続性は、神の精神の永続性からも生じると言える。

(c) 善意志について。第一に、グリーンは、『倫理学序説』第251節で以下のように述べている。

ここで我々は、……あらゆる形の真の善さは、それ自身の実現以外に  
目的を持たない、善くあろうとする意志の上に基づかなければなら  
ないという確信を手に入れる。

---

ともに過ぎ去るようなものと対立されうる善の主体として考えるためには、ある仕方で、自分自身を他者と同一視しなければならない」（PE 246）、「靈魂不滅のいかなる理論も知らなかった知的発展の段階で、人々は、その生が自分たち自身の生であるが、自らの死後も存続する社会という考えにおいて、自分自身を動物的生存の限界を超えて運ぶ媒介を、すでに手に入れている」（PE 231）。

善意は、それ自体の実現以外に目的を持たない。言い換えれば、それ自体が目的である。だとすれば、究極目的すなわち真の善である。裏を返せば、真の善は、善意のうちにある。この意味で、善意に基づくものである<sup>4</sup>。

第二に、グリーンは、『倫理学序説』第 244 節で以下のように述べている。

社会的善への関心が社会的価値——家族や部族の善い成員、善い市民をつくる性質——の何らかの判明な観念を伴うあらゆる時と場所で、我々は、その目的が、唯一の善は善くあることだという確信である、意識の教育の端緒を手に入れる。このプロセスは、真の善は全員にとって善く、同一の本性と能力のおかげで全員によって善いという確信としてその目的が記述された、先に分析されたプロセスを適切に補完する。一方のプロセスが他方のプロセスを補完するのは、それを追求する際に利益の競合がありえない唯一の善、それを追求しうる全員にとって真に共通する唯一の善は、善くある普遍的意志のうちにある善——自分自身の人格と他者の人格における人間性を最大限かつ最善に活用する、各人の側での安定した性向のうちにある善だからである。  
(強調は引用者)

真の善とは、全員に共通する善すなわち共通善である。共通善とは、善くある普遍的意志である。言い換えれば、自己の人格と他者の人格とのうちにある人間性を最善にする安定した性向である。

(d) 相互奉仕の理想への献身について。第一に、グリーンは、今しがた見た一節（「社会的善への関心が社会的価値を……」）に続けて以下のよ

---

4 上の一節のすぐ後で、グリーンは、善意を、心の清さと言い換えている (PE 251)。

うに述べている。

全員にとっての善に関する共同体の確信は、相互奉仕の理想への献身以外の何かが、それに準拠して、善であるものの我々の観念が形成される目的である限り、それらの観念と決して真に調和されることはできない。

グリーンは、共通善を、全員にとっての善と言い換えている。そして、全員にとっての善とは、相互奉仕の理想への献身である。以上から、共通善とは、相互奉仕の理想への献身である。

(e) 人間の完成について。第一に、グリーンは、『倫理学序説』第 288 節で以下のように述べている。

究極善が現実<sup>に</sup>獲得される生とは何かに関する我々の見解は、決して適切なもの<sup>ではありえない</sup>。……この理由で、その観念が道徳的生を動かす人間の完成は、それが現実<sup>に</sup>獲得された時に何であるかを、我々が言うことはできないとしても、その何かが人間の完成の観念を満たすとすれば、満たさなければならない条件を、我々は識別できる。その何かは、——抽象における何らかの人間の能力、あるいはまったく人間ではなくなるだろう、社会的関係からの分離された想像上の個人の完成ではなく——人間の完成<sup>でなければならない</sup>。我々は、それ故、次のことを主張する際に正当化される。すなわち、その何かは、単なる科学的、芸術的な活動の生において獲得されず、それらの活動を欠いた実践的活動の生においても獲得されない、と。さらに、その何か<sup>が獲得される生は</sup>、全ての人が自由に意識して協働する社会的生<sup>でなければならない</sup>、なぜなら、そうでなければ、自分自身にとって目的である行為者としての彼らの本性の可能性は、その何かにおいて実現されえないだろうからである、と。(強調は引用者)

究極善とは、人間の完成である。人間の完成とは、社会的関係から抽象された個人の完成ではない。少なくとも、全員が自由に協働する社会において実現される生でなければならない。若干敷衍して言えば、自由な社会の中で協働する、共存——すなわち社会的関係の中でのみ存在することができる相互依存的な存在者——としての人間の完成である。それは、具体的には、科学的活動や芸術的活動をその構成要素の一つとする実践的活動のうちにある。

第二に、グリーンは、『倫理学序説』第 280 節で以下のように述べている。

アリストテレスにとっても我々にとっても真である、人間の魂の力能の実現あるいは人間の完成としての善の形式的定義を、……。アリストテレスにとっても同様に我々にとって、個人にとっての善は、善くあることである。そして、善くあることとは、ある仕方ですら私心なしに、あるいは人間を完成するために、人間の完成に貢献することである。

上の一節で、善とは真の善を指す。真の善とは、人間の完成すなわち人間の魂の力能の実現である。個人の観点から見れば、善くあること、すなわち人間の完成に私心なしに貢献することである。

第三に、グリーンは、『倫理学序説』第 247 節で以下のように述べている。

我々が善意志を理解するのは、そのように〔善さあるいは道徳法則という抽象的観念によって支配された意志として：引用者〕ではない。ここで支持しようと努めている原理は、人間の性格の完成——社会の完成でもある個人の完成および個人の完成でもある社会の完成——は、人にとって絶対的価値ないし内在的価値を持つ唯一の対象であること、

この完成は、人間の諸能力に関する神の観念あるいは計画による人間の能力の実現のうちにあるので、我々は、それがすでに獲得されたのでなければ、それが何かを詳細に知り、記述することはできないこと、……

絶対的な価値を持つ対象とは、真の善である。それは、人間の完成である。人間の完成は、個人の完成と社会の完成とから成る。具体的には、神の計画による人間の能力の実現のうちにある。

第四に、グリーンは、『倫理学序説』第 285 節で以下のように述べている。

それ [ギリシアの哲学者においてはじめて形式的表現を見出した善と善さとの観念：引用者] は、適切な意味で、すなわち人と人との間でその獲得のために競合がありえないという意味で、全ての人に共通する対象への関心を含意する。そしてこの条件を満たす関心だけが、何らかの形で、人間の完成あるいは人間の魂の力能の完成への関心である。

真の善とは、全員に共通する対象への関心を含意するもの、すなわち共通善である。共通善とは、人間の完成あるいは人間の魂の力能の完成である。

第五に、グリーンは、『倫理学序説』第 285 節で以下のように述べている。

国家と階級という古い障壁が崩され、観念と願望において全員を含む新しい社会が、「天の父が完全であるように、完全であれ」という共通の召命に基づいて、形成されつつあった時、この召命が実現されるべき有徳な生の様式に関して、国家的限界あるいは儀式的限界から解放された確固たる概念が必要となった。……そのような概念が出現し

ていたのは、ギリシア哲学の結果、あるいはむしろギリシア哲学が表現する道徳について一般的に反省した結果であった。この概念によって、人々は、神の王国の市民として、自分自身と他者とにおいて促進することが、自分たちの共通の目的となるべき、善さについての共通の理解に到達できた。完全な生への努力において助けられる、全員に対する全員の相互的請求は、こうして、ギリシア・ローマ世界の道徳文化と同化した全ての人にとって理解可能な言葉の中で表現されることができた。

「神の王国の市民として、自分自身と他者とにおいて促進することが、自分たちの共通の目的となるべき、善さについての共通の理解」とは、共通善をまさに述べたものである。共通善とは、完全な生である。言い換えれば、完全であれ、という召命が実現された有徳な生である。完全な生とは、個人の完成にとどまらない。全員に対する全員による請求に応える社会の完成でもある。

まとめると、共通善とは、各人がそれを得ることが、全員がそれを得ることに貢献するような心の状態あるいは性格である。具体的には、(a) 能力の実現、(b) 永続的自己の充足、(c) 善意志、(d) 相互奉仕の理想への献身、(e) 人間の完成である。

では、(a) ～ (e) は、共通善と、どう関わるのだろうか。

上の問いに答える第一の手掛かりとなるのは、先に見た『倫理学序説』第 247 節の一節（「我々が善意志を理解するのは、……」）である。上の一節で、絶対的価値を有する唯一の対象すなわち真の善とは、人間の完成である。そして、人間の完成は、人間の能力の実現と言い換えられている。それは、人間の完成を目指す善意志でもある。

上の問いに答える第二の手掛かりとなるのは、先に見た『倫理学序説』第 244 節の一節（「社会的善への関心が……」）およびそれに続く一節（「全員にとっての善に関する共同体の確信は、……」）である。共通善と



は、善くある普遍的意志すなわち善意志である。具体的には、相互奉仕の理想への献身である。

以上に鑑みれば、(a)～(e)は、真の善すなわち共通善という同一の事柄の諸側面であると言える。

では、上の諸側面の間には、どのような関係があるのだろうか。この関係について、グリーン自身は明確に述べていない。その関係を推測すれば、次のようになる。すなわち、真の善すなわち共通善とは、人間の完成である。それは、人間の能力の実現でもある。人間の完成は、永続的な自己充足をもたらす。ところで、人間は不完全なものである。それ故、人間にとって、人間の完成は、目指すべきだが到達できない理想にとどまる。しかしながら、その理想を目指す善意志は、人間の完成という理想を先取するものであり、その善を分有するものである。善意志とは、具体的には、人間の完成を目指す相互奉仕の理想への献身である。以上に鑑みれば、人間の完成こそが他の諸側面を統制する最も重要な側面であると言える。

では、人は、共通善に資するために、何をすべきだろうか。この問いに答える第一の手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第183節の以下の一節である。

ある人が人間の完成に貢献する対象の獲得にどれほどに献身するとしても、その目的を彼が有効に促進することのまさに条件は、彼が現実に関心を持ち働きかける対象が、限定された範囲を持つということである。ある絶対的で全てを包括する目的の、表現されず表現しがたい観念は、疑いなくそのような献身の源泉であるが、制限された表出しかできない個々の機能の実現においてのみ、その効果を発揮できる。その観念が我々に対して何らかの実践的影響を持つのは、我々が共通善を自分自身の善と考えるような社会の成員である限りでのみである。そして、この成員であることは、その観念の、我々の個人的実現における限定を含意する。各人は、自らの地位の義務を第一に履行し

なければならない。

個人が共通善に貢献するためには、自己の善と社会の共通善とを同一のものとして見なして、その善に資する対象を獲得するために献身しなければならない。とはいえ、個人が関心を持つ対象は、自らの地位によって限定されている。それ故、個人が共通善に資するためには、少なくとも自らの地位の義務を果たさなければならない。

上の問いに答える第二の手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第 283 節の以下の一節である。

そのような善 [共通善：引用者] は、多くの様々な形で、自らの追求においていかなる共同体もまったく意識しない人々によって、自らの仕事を、自分自身への称賛を顧慮せずに可能な限り善くする心構えを持つ職人や著述家によって、自らの家族の教育に献身する父親や、自らの国家への奉仕に献身する市民によって追求されうる。

共通善に資するためには、自らの仕事を私心なしに行い、家族の扶養や教育に献身し、国家への奉仕に献身すればよい。

上の問いに答える第三の手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第 234 節の以下の一節である。

人の福利の考えは、自らにとって、社会秩序が……自らにとって規定した様々な関心——おそらく自らの家族の扶養から、公衆衛生の改善や哲学体系の創出まで及ぶ関心——の成功した追求において生きている自分自身の考えであろう。

「人の永続的な福利」( *ibid.* ) に資するためには、社会的善に貢献しなければならない。その貢献とは、具体的には、家族の扶養、公衆衛生の改善、

哲学体系の創出などである。

### 第3節 共通善の非競合性

#### シジウィックによる批判

第2節で見たように、共通善を追求する人々の間で競合は起こりえない。この点について、グリーンは『倫理学序説』第283節で以下のように述べている。

それ〔自らの目的の個人による追求における一般的便宜の尊重を主張するために十分に強く、そうするために聴き従われる、社会的権威：引用者〕は、自らの起源を、その対象が共通善、そのために人と人との間にいかなる競合もありえない努力における善、何らかの個人によるその追求が、他人と自分自身にとって平等な奉仕である善である利益の中のみ持ちうる。(強調は引用者)

共通善とは、他者への奉仕が自己への奉仕ともなる善である。言い換えれば、自己にとっての善が他者にとっての善ともなるようなものである。だとすれば、それを追求する際に人々の間に競合は起こりえない<sup>5</sup>。

上の見解に対して、シジウィックは、『T・H・グリーン、ハーバート・スペンサー、J・マーティノーの倫理学に関する講義』の中で、以下のように批判している<sup>6</sup>。

- 
- 5 神の計画の中で、自己にとっての善と他者にとっての善とは競合しない。だが、話はここにとどまらない。グリーンを考えでは、共通善は、すでに多少とも実現している。そして、人が追求すべき理想である。
  - 6 Cf. Nicholson *op. cit.* 萬田悦生「グリーンの政治思想と共同善」行安茂編『イギリス理想主義の展開と河合栄次郎——日本イギリス理想主義学会設立10周年記念論集』世界理想社、2014年、52-79頁、参照。

完成あるいは能力の完全な実現という観念を採用する、ある個人にとっての真の善のグリーンによる概念を詳しく検討する時、我々はその概念が、誰か他の個人の真の善と競合しえないように現実に構成されているということを見出さない。というのは、人間の能力のこの実現は、「とりわけ道徳的な徳」と同じように、「芸術と科学」を含むと繰り返し述べられているからである。(L 69)

第2節で見たように、共通善は、芸術の能力や科学研究の能力の実現を、その構成要素の一つとする。ところで、これらの能力を実現するためには、「本、絵画、長期間の教育、様々な旅行、知的社会に参加する機会」(Ibid.)が必要となる。これらのものを手に入れるためには、富が必要となる。そして、富を手に入れるために、人々は競合しなければならない。だとすれば、共通善——少なくともその一部である芸術の能力や科学研究の能力の実現——は、それを追求する際に人々の間に競合が起こりうるものである。

これに対して、次のような反論を、シジウィックは予想している。すなわち、芸術の能力や科学研究の能力の実現は善い。しかしながら、道徳的善は、それらの能力の実現よりも善い。それ故、道徳的能力を実現するために、芸術的能力や科学的能力の実現を放棄する自己献身は、それを行う人の本性すなわち能力のより完全な発展をもたらす、と。

上の反論に対して、シジウィックは、以下のように応えている。

これが真でありうるのは、大切に育成すべき他の全ての技術や才能と比較された「とりわけ道徳的な徳」の重要さの点での優越がとても大きいので、それらの選択肢は実践的に通約不可能だと見なされうると主張されるからでしかない。しかし、そうだとすれば、思うに、とりわけ道徳的な徳の促進は、——この方向で行われるべきことの全体的な価値に鑑みれば、——整合性の点で、実践的な博愛主義者の注意の

大きなシェアを占めなければならないので、グリーンが芸術と科学とを組み込むことは、ほとんど現実の意義も持たないということが判明するだろう。(L 71)

上の反論が成り立つとすれば、道徳的徳の実現は、芸術の能力や科学研究の能力の実現よりも比較を絶して優越しなければならない。言い換えれば、両者の価値は通約不可能でなければならない。だとすれば、芸術の能力や科学研究の能力が共通善の構成要素の一つであるというグリーンの見解は、ほとんど意義を持たない。

続けて、シジウィックは、以下のように述べている。

グリーンは、人間の能力の完全な実現について考える時、科学的能力の実現とあらゆる類の知識の追求だけでなく、芸術的能力の発展と趣味の育成をも取り入れる。グリーンがその実現の非競争的性格を明らかにしたいと望む時、それが徳と善意志に縮小することを我々は見出す。(L 72)

一方で、グリーンは、真の善とは人間の能力の実現であると述べる際には、科学的能力や芸術的能力の実現をその構成要素の一つとする、広い善の観念を採用している。広い善は、今しがた見たように、それを追求する際に人々の間で競争が起こりうる。他方で、グリーンは、真の善が非競争的であると述べる際には、徳や善意志だけから成る狭い善の観念を採用している。ところで、「最も無慈悲な競争も、最も弱い競争者の側での徳の発揮に干渉しない。彼は最も成功ライバルと同じくらいひたむきに断固として善くあることを意志できる」(Ibid.)。だとすれば、狭い善は、それを追求する人々の間で競争が起こりえない。以上から、グリーンは、広い善の観念と狭い善の観念との間で、振り子のように揺れ動いていると言える。ところで、グリーンの見解が整合的であるためには、真の善とは人間の能

力の実現であると述べる際だけでなく、真の善が非競合的であると述べる際にも、広い善の観念を採用するという立場を採らざるをえない。しかしながら、先に見たように、広い真の善は、それを追求する人々の間で競合が起こりうる。だとすれば、真の善は非競合的であるというグリーンの見解は、説得力を持たない。

### シジウィックによる批判の検討

共通善は、それを追求する際に人々の間で競合が起こりうるという、シジウィックによる上の批判に、グリーンはどう応えるだろうか。アーウィンの考えでは、グリーンは以下のように応える。すなわち、共通善は、善意志のような道徳的善と、芸術の能力や科学研究の能力の実現のような非道徳的善とから成る。ところで、非道徳的善は、それを追求する人々の間で競合が起こりうる。しかしながら、この競合は、道徳的善によって規制される。言い換えれば、善意志という道徳的善が、非道徳的善の分配の仕方を決める。若干敷衍して言えば、社会の全成員の能力の実現に資するような仕方で、各人の能力を実現するために必要な資源が分配される。だとすれば、共通善は、全体として見れば、それを追求する人々の間で、解決できない競合は起こりえないものである、と<sup>7</sup>。

アーウィン自身は挙げていないが、彼の解釈を支持する論拠となるのは、『倫理学序説』第381節の以下の一節である。

芸術におけるあらゆる卓越性と同じように、音楽における卓越性は、それにとって道徳的徳が本質的であり、それらの卓越性がなければ人間の魂の能力の実現にならないだろう、精神的生の全体の中の一つの要素として、その価値を有する。……例えば、市民生活が崩壊してそ

---

7 Irwin, Terence H., *Development of Ethics: A Historical and Critical Study*, 3 vols., Oxford University Press, 2007-2009.

の道徳的精力が低下していた、前世紀のイタリアのある公国で、音楽における卓越性は、その時点での現実的な価値をほとんど持ちえなかった。……そのような状態で、音楽に多く従事することは、音楽の価値が現実化される生の獲得のために満足されなければならない、人間の魂の要求に対する無関心を含意するだろう。

道徳的徳は、人間の魂の能力の実現すなわち共通善の本質的な構成要素である。他方、音楽における卓越性は、共通善の非本質的な構成要素である。ところで、市民生活が崩壊した社会において、音楽における卓越性を追求することは、困窮した他者を助けるといった人間の魂の要求（道徳的徳）に対する無関心を意味する。だとすれば、共通善に資さない。それ故、そのような追求は、差し控えるべきである。以上に鑑みれば、道徳的徳は、音楽における卓越性などの非道徳的善の分配を規制する。だとすれば、共通善は、全体として見れば、それを追求する人々の間で、解決できない競合が起こりえないものである。

アーウィンの解釈は、一定の説得力を持っている。しかしながら、共通善は、それを追求する人々の間で競合が起こりえないものとグリーンが明言している、先に見た一節（「それは、自らの起源を……」）と齟齬を来す。

では、共通善は、それを追求する際に人々の間で競合が起こりうるという、ジジウィックによる上の批判に、グリーンはどう応えるのだろうか。この問いに答える第一の手掛かりとなるのは、先に見た『倫理学序説』第381節の一節（「芸術におけるあらゆる卓越性と同じように、……」）、およびそれに続く以下の一節である。

社会のより善い状態で、ある個人の個々の立場から生じる要求——音楽の卓越性の追求を、彼と同じように才能のある他の人にとっては正しい追求にするが、その個人にとっては不正な追求にするだろう要求

——がありうる。そのような要求がない時、主要な問いは彼の個別的な才能に関わるだろう。彼は、何か他の道でよりも、音楽家として一層多く人類に資する才能——人間の魂の完成に貢献する才能——を持つだろうか。彼がその才能を持つ場合に限って、彼は音楽を自らの主要な追求にする際に正当化されるだろう。

(a) 市民社会が崩壊した社会で、ある人が困窮した人々を助けずに、音楽における卓越性を追求すること、(b) 市民社会が崩壊していない社会のより善い状態において、ある人が、家族を扶養できる収入を得るために音楽家以外の職業に就く必要があるケースで、音楽の卓越性を追求すること、(c) 音楽の才能よりも建築の才能を有する人が、音楽における卓越性を追求することは、自分だけの能力の実現である<sup>8</sup>。社会の他の成員の能力の実現に資さない。言い換えれば、共通善とならない。それ故、それを追求することは正当化されない。裏を返せば、ある人の非道徳的な能力の実現は、社会の他の成員の能力の実現に資する場合に限って——若干敷衍して言えば、道徳的善ともなる場合に限って——共通善となる。それ故、それを追求することが正当化される。だとすれば、能力の実現すなわち共通善を追求する人々の間で競合は起こりえない。

目下の問いに答える第二の手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第 377 節の以下の一節である。

人間精神の統一のおかげで、各人にとって個人的な目的はあるにしても、人間精神の可能性の実現は、それが人間社会全体によって達成さ

---

8 (a) は、先に見た『倫理学序説』第 381 節の一節のうち「例えば、市民社会が崩壊し……人間の魂の要求に対する無関心を含意するだろう。」に対応している。(b) は、今したが見た一節のうち、「社会のより善い状態で、……要求がありうる。」に対応している。(c) は、「そのような要求がない時、……正当化されるだろう。」に対応している。



れる限りでのみ、一人によって完全に達成される目的となる。(強調は引用者)

ある個人の能力は、社会の他の成員の能力が実現される場合に限って実現される。若干敷衍して言えば、ある人の能力の実現は、社会の他の成員の能力の実現に資する場合に限って、その人自身にとっての真の善（共通善）となる。だとすれば、ある人の能力の実現と社会の他の成員の能力の実現とは、相互に依存している。それ故、能力の実現すなわち共通善を追求する人々の間で競合は起こりえない。

目下の問いに答える第三の手掛かりとなるのは、『倫理学序説』第 191 節の以下の一節である。

このこと〔社会における人間精神の実現は、その機能が実現される程度に応じてのみ獲得されうること：引用者〕から、全ての人格は、同一の仕方では発展されなければならないことは、帰結しない。人類の生存そのものが、両性の区別を前提とする。そして、両性の機能には必然的な違いがあるので、これに対応して、男性と女性の人格性が発展される様態の間には違いがなければならない。再び、……社会的立場と権力の区別は、人間の人格性の発展に必ず伴うかのように、確かに見えるだろう。物質的な事物を占有する承認された力能がなければ、この発展はありえない。この占有の効果は、才能と機会によって異なるに違いない。そして、この効果の多様性から、再び、人格性が異なる人において取る形の違いが生じなければならない。……こうして、人間社会のあらゆる可能な状態で、自らの立場が許す最善のものである一方の人は、自らの立場が許す最善のものである他方の人とは、非常に異なるだろう。

能力の実現は多様である。具体的には、社会的立場や才能によって異なる。

だとすれば、音楽における卓越性を追求する才能や機会を持たない人は、音楽以外の能力を実現すればよい。以上から、能力の実現を追求する人々の間で競合は起こりえない。

まとめると、ある人の非道徳的な能力の実現は、社会の他の成員の能力の実現に資する場合に限って、共通善となり、自己にとっての真の善となる。加えて、能力の実現は多様である。以上から、能力の実現を追求する人々の間で競合は起こりえない。

以上に鑑みて、シジウィックによる上の批判に対して、グリーン立場からあらためて応えれば以下ようになる。すなわち、シジウィックが指摘するように、芸術的能力を実現するためには、「本、絵画、長期間の教育、様々な旅行、知的社会に参加する機会」といった手段が必要である。これらの手段を追求する人々の間で競合が起こりうる。しかしながら、市民社会が安定している、より善い社会では、ますます多くの人がこれらの手段を獲得できる。それ故、これらの手段を追求する人々の間で競合は起こらなくなる。

加えて、シジウィックが芸術的能力の実現を競合的なものと見なすのは、各人は自分だけの能力の実現を利己的に追求する、と考えるからである。他方、先に見たように、グリーン考えでは、自分だけの芸術的能力の実現は、共通善とはならず、従ってまた自己にとっての真の善ともならない。具体的には、家族を扶養せず、周囲の困窮した人々を助けずに、自分だけのピアノ演奏の能力の実現を利己的に追求することは、共通善に資さず、従ってまた自らの真の善ともならない。裏を返せば、自らの芸術的能力の実現は、社会の他の成員の能力を実現するために資する場合に限って、共通善となり、従ってまた自らの真の善ともなる。例えば、ベートーヴェンの芸術的能力の実現は、他者を慰め、生きる力を与えることによって、他者の能力の実現に資する。言い換えれば、人類の能力の共同の実現

に資する<sup>9</sup>。それ故、共通善となる。だとすれば、共通善を追求する人々の間で競合は起こりえない。

加えて、個々の芸術的能力——例えばピアノ演奏の能力——の実現は、社会の全員の能力の共同の実現すなわち人間の完成に資する仕方のうちの一つに過ぎない。だとすれば、社会的立場、周囲の事情、才能のあり方によって、ピアノ演奏の能力の実現を追求することが適切でないケースでは、それ以外の能力の実現を追求すべきである。そのような追求は無数にありうる。だとすれば、能力の実現を追求する人々の間で競合は起こりえない。

### 共通善の学説の意義

以上で見た共通善の学説は、どのような意義を持つだろうか。

別稿で見たように、グリーンは、快楽主義を批判している<sup>10</sup>。その上で、快楽主義の対案として、共通善の学説を提案している。

快楽主義によれば、究極善は、個人の快楽である。個人の快楽は、それを享受する個人だけにとっての善、すなわち利己的な善である。この点に関して、快楽主義には、次のような問題点がある。第一に、自己にとっての善と、家族や親しい友人にとっての善とは、時に分ちがたく結び付いている。それらの善は、自己にとっての真の善の本質的な構成要素となる。それ故、自己にとっての善だけを追求しても、自己にとっての真の善を手に入れることはできない。第二に、自己だけにとっての善——例えば、快楽、富、権力、名声など——は、自らの死とともに、その人にとっては

---

9 共通善は、共通の自己実現、共同の実現であると、シモニーは述べている (Simhony, *op.cit.*, Simhony, Avital, *T. H. Green and Henry Sidgwick on the 'Profoundest Problem of Ethics'*, Mander W.J. ed., *Anglo-American Idealism, 1865-1927*, Greenwood Press, 2000, pp.33-50.)。

10 水野俊誠「快楽主義に対するグリーンによる批判の評価」2021~2023 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) No.21H00468 研究グループ編『生命倫理・生命法研究論文集』2022 年、103-133 頁、参照。

消滅する。それ故、人生の終わりが近付いている人にとって、その意義を失う。だとすれば、自己だけにとっての善を追求することは、自己にとってさえ虚しいことである。

他方で、先に見たように、グリーンの考えでは、究極善は、自己だけにとっての善ではない。自己にとっての善であると同時に他者にとっての善ともなる共通善である。加えて、共通善は、自己の死を超えて永続する<sup>11</sup>。以上から、グリーンによる共通善の学説は、上の二つの問題点を持たない。

以上に鑑みれば、共通善の学説は、快樂主義の有力な対案となる。加えて、自己だけにとっての善をもっぱら追求する現代の風潮に対する批判ともなる。これらの点にこそ、共通善の学説の意義がある。

## おわりに

共通善とは、各人がそれを得ることが、全員がそれを得ることに貢献するような心の状態あるいは性格である。具体的には、(a) 善意志、(b) 相互奉仕の理想への献身、(c) 能力の実現、(d) 永続的自己の充足、(e) 人間の完成という諸側面から成るということを、明らかにした。

共通善を追求する人々の間で競合は起こりえない。この点に関して、シジウィックは次のように批判している。すなわち、グリーンの考えでは、共通善は、芸術的能力や科学的能力の実現を、その構成要素の一つとする。これらの能力を実現するためには、資源が必要となる。資源を獲得するためには、競合しなければならない。だとすれば、共通善は、それを追求する人々の間で競合が起こりうるものである、と。

上の批判に対して、グリーンの立場から、以下のように応えうるとい

---

11 若干敷衍して言えば、共通善において、自己にとっての善と他者にとっての善とを隔てる仕切りは取り除かれている。加えて、死の敷居は乗り超えられている。

うことを論証した。すなわち、ある人の非道徳的な能力の実現は、社会の他の成員の能力の実現に資する場合に限って、共通善となり、自己にとっての真の善となる。加えて、能力の実現は多様である。以上から、能力の実現を追求する人々の間で競合は起こりえない。

(みずの・としなり 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

### Common good in Green's *Prolegomena to Ethics*

Toshinari MIZUNO

(1) Common good is the central concept in Green's ethics. However, the concept has been criticized as being ambiguous. This paper aims to clarify the concept further.

Common good is "a state of mind or character of which the attainment, or approach to attainment, by each is itself a contribution to its attainment by every one else." It consists of the following aspects: (a) realization of human capacities, (b) satisfaction of abiding self, (c) good will, (d) self-devotion to an ideal of mutual service, and (e) the perfecting of man.

(2) Common good is "a good in the effort after which there can be no competition between man and man." In this respect, Sidgwick criticizes Green. According to Green, common good includes the realization of scientific and artistic capacities, which requires resources and wealth. If men must compete for resources and wealth, then common good may introduce competition between man and man.

This paper argues that Sidgwick's criticism of Green can be responded to as follows: Only when one's realization of capacities contributes to realization for other members of society, it can be a common good, and therefore one's true good.

Moreover, given that human capacities are various, common good is non-competitive between man and man.